維新のふるさと・萩へ

今年の大河ドラマ『新撰組』。
斬新なキャストと脚本が話題を呼び、特に若い人たちの心を惹き付けています。
その新撰組とは敵対関係にあったのが長州。
でも、なぜ本州の西端の小さな国で日本を大きく動かす維新のエネルギーが育まれたのでしょうか。
志士たちの志の源泉に触れたくて、維新のふるさと山口県萩市を歩きました。

文 ● 網野ゆかり

吉田松陰誕生地／松陰神社の東の山の上にある松陰の生家の地。杉家の墓所もあり、塾生たちが建てた松陰の墓のほか、晋作・久坂らの墓碑もある。写真左端の山が萩城のある指月山。

今年は萩開府400年。萩のまちは、記念事業が目白押しです。中でも11月には高杉晋作資料室を備えた「萩博物館」の開館、萩城跡「北の総門・外堀」の復元完成など、萩を訪れるならこれからの季節が面白いといえます。

本州の西端の小藩である長州が維新胎動の地となったのは、そもそも関ヶ原の戦い後、藩主毛利氏が徳川家康によって、それまでの中国地方8カ国120万石から、わずか36万9千石の防長2州（周防・長門＝現在の山口県）に押し込められたことに端を発する、とよくいわれます。

しかも、毛利氏は当初、交通の便のよい山陽側に城を築こうとしたものの、家康から許されなかったという経緯もあり、藩内には幕府に対する鬱屈した思いが2百年以上にわたってくすぶりつづけ、それが倒幕へつながったというのです。

これについては、歴史研究家の一坂太郎氏が著書『高杉晋作を歩く』（山と渓谷社）で、面白い逸話を紹介しています。

「たとえば、こんな伝説がある。毎年正月、家老が長州藩主に挨拶する際に、『殿、今年いたしましょうか』と問う。すると藩主は『まだ早かろう』と返答する。実は幕府打倒の意志を確認していたというのだ」――。

この伝説が事実かどうかはともかく、静かで小さなこの城下町を歩いていると、日本の歴史を大きく動かした維新の原動力が、いったいどこから生まれたのか、探ってみたくなります。

萩八景遊覧船から城下町の歴史が見えてくる

萩の風景といえば、土塀と夏みかん。でも、川筋の風景も風情があっていいものです。

「城下町萩は、日本海に注ぐ阿武川の三角州に作られたまちで、萩城は海に面して建てられています。これまでの萩観光は、城下町を歩いて巡るもの。でも、本当の萩の姿を知るには、川からまちを見るのが一番だと考えたんです」

と語ってくださったのは、今年の夏から始まった「萩八景遊覧船」を企画した萩市役所観光課の職員です。遊覧船による萩巡りの評判は、早くも上々。「遊覧船は最後に日本海へ出て、指月山にある萩城跡を海から眺めるんですが、普段表から見る穏やかな山の姿とは全く異なり、海から見る指月山は荒々しい岩肌がむき出しで、萩城の二面性を見ることができます」

実際、萩のまちは川をたどると、まちのあり方がよくつかめます。松本川と橋本川という2つの川に挟まれた萩は、かつて湿地帯が多く、築城は埋め立て工事から始まりました。その後も幾度となく、町は洪水に見舞われ、そんな度重なる自然災害との闘いが、武士も庶民も身分をこえて協力しあう気風を培い、それが萩の人づくりの基本になった、と推測する郷土史家もいます。

松下村塾のある松陰神社

グローバルな視点をもった行動の師・吉田松陰

人づくりといえば、やはり吉田松陰を忘れることはできません。松陰が教えた「松下村塾」からは高杉晋作・久坂玄瑞といった思い半ばで散った維新の志士をはじめ、日本初の総理大臣となった伊藤博文・山県有朋・品川弥二郎など、明治以降も中央政府で活躍した多くの人材が育っています。

木戸孝允（桂小五郎）旧宅
晋作誕生地から歩いてすぐの地にある、木戸孝允の生家。桂は17歳のとき、藩校・明倫館で兵学師範だった松陰（当時20歳）に師事。新撰組による池田屋事件では危うく難を逃れ、後に坂本龍馬の斡旋で西郷隆盛らと「薩長同盟」を結び、維新政府樹立に活躍した。

その松下村塾の遺構は今も「松陰神社」境内に残されていて、わずか8畳の物置小屋と、塾生たちと松陰自ら大工道具を握って増築した10畳半の部屋と土間一坪が、塾の全容。訪ねてみれば、そのあまりの粗末さに驚くとともに、松陰がそこで教えたのはわずか2年半と聞くと、人が人に与える影響力の計り知れなさを思わずにはいられません。

松陰の門下生といえば、高杉晋作・久坂玄瑞・入江九一・吉田稔麿が松陰門下の「四天王」。中でも松陰は、晋作の前で何かと久坂を誉めては、久坂の一つ年下の晋作を奮起させ、二人を競い合わせて、互いの長所をのばす教育を行ったといいます。

松陰が塾生たちに説いたのは、行動を起こすために学問をせよ。そして常に世界の形勢、日本の政治状況にたって、危機にどう対処し、どう行動すべきかを自ら考えよ――という。

鍵曲（かいまがり）
敵を迷わせて追いつめるため、道を曲げて見通しのきかないようにした鍵曲。萩には各所に、この鍵曲が残っている。

ということ。そうした松陰のグローバルな考え方と実践力は、変革の時代である現代にも通じるもの。だからでしょうか。今、松陰に関心をもつ人には、企業の経営者や教育者が実に多いのだそうです。

白虎隊の遺徳をしのぶ石版画が萩に？

ところで、新撰組や会津藩とはライバル関係にあった長州ですが、萩の中心街に近い地蔵堂に、なぜか会津の白虎隊が飯盛山で自刃したときの様子を描いた石版画が、今もひっそりと奉納されています。だれがどんな目的で、どんな思いで奉納したのかは謎ですが、この石版画はすでに明治10年ごろから掲げられていたといいます。そのころは、明治政府の強引な改革で困窮を極めた不平士族が、官職を辞して帰郷した前原一誠をリーダーとして、維新のお膝元・萩のまちで兵を挙げた「萩の乱」が鎮圧されて間もないころ。萩博物館の樋口尚樹氏は、「もしかすると、萩の乱の悲劇を白虎隊の悲劇と同一視した人々が白虎隊士に託して密かに萩の乱の犠牲者を弔ったものでは」と推測しています。

さて、今年の大河ドラマ「新撰組」に登場した長州人といえば、石黒賢さん演じる桂小五郎と、池内博之さん演じる久坂玄瑞が挙げられます。久坂玄瑞の生誕地は今、碑がたつのみですが、桂小五郎の生家は現存し、近くには高杉晋作誕生地、伊藤博文が少年時代奉公に出ていた円政寺など、萩の地図を広げると歴史上の人物の名がそこかしこにあり、幕末を身近に感じることができます。

あなたも維新のふるさと萩を歩いて、混迷の時代を懸命に生きた志士たちの熱い息吹を感じてみませんか。

菊屋横丁／藩の御用商人・菊屋家の土蔵が並ぶ小路。この向かいに、高杉晋作誕生地がある。この辺りは、主に上級・中級武士の屋敷が立ち並んでいた。

萩八景遊覧船
船は萩城そばの指月小橋からスタート。映画「釣りバカ日誌12」の舞台となった風景や藩政時代から残る石橋、平安古伝統的建造物群保存地区などが船上から楽しめる。3月から11月まで。詳しくは萩市観光協会へ（TEL 0838-25-1750）